初期豆男物の系譜と趣向の研究

（要旨）

広島大学大学院文学研究科
博士課程後期人文学専攻
学生番号：Ｄ１６５９６２
氏　名　：福岡　依鈴

本論文は、豆男物と呼称される、近世中期から末期にかけて流行した作品群の中でも、宝暦期から安永期にかけて、江嶋其磧『魂胆色遊懐男』（正徳二年〈一七一二〉頃刊か。以下、『懐男』）にある魂の入れ替わりの趣向と身体の微小性という趣向を両方引き継いだ作品（以下、両方の趣向を用いた作品群を「初期豆男物」と表記）が多く板行されたことに着目し、影響関係が認められる作品同士の比較を通して、初期豆男物の趣向の変遷の一端を明らかにすることを目的としている。本論は、具体的な分析が行われていない作品に焦点を当てた第一部「『栄花遊二代男』以降の初期豆男物の研究」と、初期豆男物全体を対象とした考察を行う第二部「初期豆男物における趣向の変遷」の二部で構成した。

第一部では、宝暦以降に板行された初期豆男物を対象とし、本文の分析や他作品との比較を行うことで、それぞれの作品にある特質を明らかにした。

第一章「『栄花遊二代男』論―後続する豆男物への影響―」は、『懐男』やその続篇である江嶋其磧『豆右衛門後日女男色遊』（正徳四年〈一七一四〉頃刊か。以下、『女男色遊』）と作者不詳『栄花遊二代男』（宝暦五年〈一七五五〉成。以下、『二代男』）の人物設定や類似した展開を比較し、『二代男』にある独自の趣向について考察を行った。『懐男』では逢坂山の仙女、『二代男』では豆休（『懐男』の主人公である大豆右衛門の法体後の名）が主人公に豆男物の主人公が持つ能力を授けるが、仙女が能力を授ける役割しかないのに対し、豆休は作蔵に忠告を与えたり、傲慢を戒めるために再度登場したりするなど、作蔵を導く役割も有している。『二代男』では、豆男物の主人公が持つ能力を授ける存在の立ち位置を変更していると考えられる。豆休を登場させる形で先行作とのつながりを明確に、続篇として執筆したことを強調しようとしたのだろう。また、作品ごとに細かな差異は見られるが、後続する初期豆男物でも、能力を授ける存在が御告げや罰を用いて主人公を導くという展開が取り入れられている。作品構成という点で、『二代男』は後続作に強い影響を与えていると考えられる。

第二章「『吾妻男仙伝枕』と業平」では、御客散人序『吾妻男仙伝枕』（明和三年〈一七六六〉成。以下、『吾妻男』）について、本文中で業平と関係がある事物について言及している箇所があることに着目し、業平の要素が用いられている章の分析を通して豆男物と業平の要素がどのように描かれているのか考察を試みた。『吾妻男』では、業平天神が主人公である豆作の願いを叶えるという重要な役割を有している上に、謡曲『杜若』の趣向や近世に広く知られていた業平の俗説を基にした章があるなど、本文中で業平の要素が多く取り入れられており、「まめ男」である業平と豆男のつながりを強調した構成となっている。

第三章「『色道修行男』試論―巻三における趣向の利用について―」では、雁金その字序『色道修行男』（明和五年〈一七六八〉序。以下、『修行男』）の巻三について、章同士に話の内容や要素に明確なつながりが見られることに着目し、巻三全体の展開の分析を行った。巻三の一は実在した市川雷蔵の話題を基に物語を構成しており、巻三の二に情交の相手として登場する山姥は、能「山姥」や浄瑠璃「嫗山姥」から趣向を得ている。この二つの章は、演劇分野から強い影響を受けているといえるだろう。また、巻三の三では醜い老婆が情交の相手として登場することから、巻三の二の山姥との関連性

が認められる。巻三は、実在した人気役者から素人役者、山姥から醜い老婆というように、趣向を連鎖的に活用していると考えられる。また、巻四の一では『懐男』巻四の二の趣向から流用したことが明らかなだけでなく、本文中で『懐男』の名を直接挙げている。巻三の一の市川雷蔵の例も踏まえると『修行男』には、趣向の基となった作品や江戸で起きた出来事について、作品名や人名などを本文中に直接掲げるという特質があるといえるだろう。

第四章「『潤色栄花娘』と観音信仰」では、漁柳序『潤色栄花娘』（明和七年〈一七七〇〉序。以下、『栄花娘』）に焦点を当て、先行する豆男物との比較や本文の分析から作品の特質を明らかにすることを試みた。先行する豆男物とは異なり、『栄花娘』では主人公のお豆に清水寺の観音の申し子という設定が付されている。また、清水寺の観音の使いが豆男物の主人公が有する能力を授け、御告げや罰を通してお豆を導く存在として数度登場することをはじめ、お豆自身が清水寺の観音の使いとして行動する章があるなど、清水寺の観音信仰が関わる部分が数多く見られる。『栄花娘』の根底には清水寺の観音信仰という要素が存在することは明らかである。御伽草子や仮名草子で女性や色恋と関連付けられていた清水寺の観音をお豆の信仰対象として描くことで、無条件に色恋を楽しむことを許されない女性の色恋を意味があるものとして正当化しようとしたのではなかろうか。

第五章「主人公の設定から見る『潤色栄花二代娘』」では、『栄花娘』の続篇である寝ぼけ先生序『潤色栄花二代娘』（安永三年〈一七七四〉序。以下、『二代娘』）について、両作品の主人公設定の相違から作品の特質を明らかにした。『栄花娘』のお豆や『二代娘』のおかべ（『潤色栄花娘』のお豆が隠居した後の名）には観音を深く信仰するという設定があるのに対し、『二代娘』の主人公である二代目お豆にはそのような設定は見られない。『栄花娘』のお豆とは異なり、二代目お豆の出自に清水寺の観音が関係しないことが、『二代娘』の観音信仰の消失に影響を与えていると考えられる。また、先行する初期豆男物の冒頭では主人公の心中描写や能力を授かる経緯を描いているのに対し、『二代娘』冒頭では、おかべやその夫の豆之進の結婚や出産を描くことで、二代目お豆の出自を説明することに重点を置いている。巻一で「男女氏系図」という、豆男や豆女の血統と彼らが主人公として活躍する作品を記した系譜図を掲げていることと合わせて考えると、巻一の一の出生譚は、『二代娘』が『懐男』からはじまる豆男物の正統な後続作であることを強調するために描かれたのではなかろうか。

第二部「初期豆男物における趣向の変遷」は、第一部で行った分析を踏まえつつ、初期豆男物全体に視野を広げ、魂の入れ替わりや身体の微小性をはじめとした趣向の変遷を辿ろうと試みた。

まず、第六章「『けいせい色三味線』から『魂胆色遊懐男』へ―魂の入れ替わりの趣向の変容―」では、江嶋其磧『けいせい色三味線』（元禄一四年〈一七〇一〉刊。以下、『色三味線』）に傾城買の心玉の憑依という、『懐男』の魂の入れ替わりと類似した趣向があることを踏まえ、両作品の本文や作品構造の比較を通して魂の入れ替わりの趣向にある独自性を明らかにしようとした。『色三味線』の傾城買の心玉は、人々に金銭を浪費させる一種の怨霊に近い存在として描かれており、作中では冒頭と結末にしか登場

しない。しかし、『懐男』の大豆右衛門は色恋を楽しむという目的を持って主体的に行動する人物として描かれている上に、全ての章で姿を現している。傾城買の心玉の憑依の趣向は物語を主体的に動かすことがないのに対し、魂の入れ替わりの趣向は物語を主体的に動かす重要な趣向として描かれているといえるだろう。また、『寛濶役者片気』（宝永八年〈一七一一〉刊か）の改板本巻末にある『懐男』の広告から、『懐男』では、傾城買の心玉の趣向から傾城買という要素を排除して魂の入れ替わりの趣向へと発展させることで、様々な立場の女性を相手にした物語を描こうとした可能性を指摘した。

続く第七章「初期豆男物における魂の入れ替わりの意義」では、比較対象を初期豆男物全体へと広げ、美人局のような策略に豆男や豆女がどのように関わっているのか分析を行い、後続作で魂の入れ替わりの趣向の扱われ方が変化した可能性があることを明らかにした。美人局が中心となる章は『女男色遊』、『二代男』、漁柳か『潤色栄花娘道中之巻』（明和七年〈一七七〇〉以降成か）に見られるが、『女男色遊』では大豆右衛門が美人局を主体的に阻止しようとしないのに対し、後続する二作品では、主人公たちが換魂能力を用いることで意図的に美人局を失敗させている。また、美人局に限らず、宝暦以降の豆男物では、豆男や豆女が他人の策略を阻止するため、あるいは自身の目的を達するために魂の入れ替わりを用いた策を講じる展開が見られるようになる。このような展開がほとんど見られない『懐男』や『女男色遊』と比べると、宝暦以降の豆男物は更に主人公に重点が置かれた構成になっているといえるだろう。

第八章「身体の微小性に関する諸考察」では、小さ子譚の系譜に連なる御伽草子と『懐男』の主人公設定の比較を行いつつ、初期豆男物における身体の微小性の趣向の変遷について考察を試みた。小さ子譚の系譜に連なる御伽草子と『懐男』では、主人公の身体の変化の過程は相反しているものの、元の姿のままでは色恋を楽しめないために姿を変じたという点が共通している。『懐男』の大豆右衛門の設定は、小さ子譚の主人公の設定を参考にし、あえて変身の順序を反転させた可能性があるだろう。また、章の後半では各作品に取り入れられた閉じ込められる趣向を比較し、宝暦以降の初期豆男物では、閉じ込められた主人公の行動や心情に重点が置かれた描写がなされていることを明らかにした。

終章では各章の内容を一瞥した上で初期豆男物の特質をまとめ、文学史的位置づけを行った。